

関西学院大学で学ぶ

杉原 左右一

わが国では現在多くの大学生が、主に受験勉強の必要から、文系または理系に偏った勉強をおこなって大学に入学してきます。大学に入学して初めて、いままであまり勉強したことがない分野の勉強に取り組み、それに興味を抱くようになる人も少なくありません。また、勉強の内容が、知識量や、記憶力の側面に主眼が置かれがちであり、思考力を養う訓練が不足していることもよく指摘されています。

ここで特に強調したいことは、自明なことではあるとはいえ、文系、理系は便宜上の区分けにすぎず、人間が関わる問題の多くは、そもそも文系、理系が融合しているものであり、かつ、単なる知識量の豊富さのみで解決できるものではないということです。例えば今年北海道洞爺湖サミットが開かれますが、地球温暖化問題、地球環境保全問題を例にとってみたいと思います。この問題に取り組むためには、少なくとも文系と理系の基礎的知識を共有していることが必要であり、かつ単に知識量だけではなく、問題の所在を正しく認識し、問題をどの様に解決すべきかを提案する能力が重要となってきます。これは一例にすぎませんが、大学で勉強するにあたっては、自身の専攻分野の勉強と並んで、異学問分野に関する基礎的知識を持つことや、国際的な視野を持って物事を捉えることが必要であり、かつ知識の量だけではなく、未知なる問題の解決にあたる意欲と創造的な発想を持つことが重要であると思うのです。このように考えたとき、まず文系、理系を問わず、異分野をも含めた幅広い基礎学力の向上を図ることが重要であり、しっかりとした基礎学力を基にして、さらに専門課程で専門性の高い、創造的な学習・研究に取り組んでいただきたいと思うのです。

次に、大学は学問を志し、勉強する場所ですが、これと同時に、自己を確立し、自分の進むべき方向を見出だす場所でもあろうでしょう。この点に関連して、孔子の有名な次の言葉を思い出さずにはおられません。

『学^{くら}びて思^{あやう}わざれば則ち罔く、思^{あやう}いて学^{くら}ばざれば則ち殆し。』(論語)

たとえ万巻の書を読破し、あらゆる事柄を学んだとしても、何のため、誰のために学ぶのかについて自ら沈思黙考することがないのなら、万巻の書も単なる知識の膨大な堆積でしかないでしょう。また逆にいかに高い志を持っていたとしても、その志を実現するに足る十分な知識を有し、学問を研鑽する努力が伴わないのなら、その様な志も単なる絵空事に終わってしまうでしょう。

そもそも大学で、「何のために勉強するのか」、「何のために生きるのか」について絶えず自問することが重要であり、また不可欠であると思います。ただし、この問いに対しての一定不変の正解はありません。皆さん一人一人がその答えを見出していかねばならないのです。その時一つの大きな指針を与えるのが関西学院の建学の精神に他なりません。この建学の精神を簡潔な言葉で表現しているのがスクール・モットーである“Mastery for Service”(奉仕のための練達)という言葉です。これまで多くの関西学院の卒業生がこの“Mastery for Service”という言葉に勇気づけられ、励まされて歩んできました。皆さんも在学中のみならず、これからの人生のさまざまな歩みの中でこの言葉と出くわすことになるでしょう。ぜひ在学中に“Mastery for Service”という言葉の意味とところや、その現代的意義について折に触れて自身で考え、思いを巡らせていただきたいと思います。

知的世界の創造を目指し、また、人生の確固たる基盤を形成するためには、皆さん一人一人が心の目を開き、夢と大志を抱いて、未知なるものへ積極的にチャレンジする精神を持つことが重要であると思います。聖書の「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。」(「マタイによる福音書」第7章第7節)という言葉はそのことを的確に言い表しています。この聖句を関西学院大学に入学されたすべての新入生の皆さん、並びに在校生の皆さんにお贈りし、皆さんの学生生活が実り豊かなものとなることを心から祈ります。

(学長)